安部公房「大きな砂ふるい」とストリンドベリ

佐々木幸喜

はじめに

本稿では、安部公房（一九二四―一九九三）に対する海外文学の影響を探る試みとして、「大きな砂ふるい」を取り上げ、スウェーデンの作家、Strindberg, Johan August（一八四九―一九一二）とのつながりを見ていく。

「大きな砂ふるい」の文献情報について、『安部公房全集』第二巻（一九九七年九月、新潮社）巻末「作品ノート」をもとに整理すると、「大きな砂ふるい」は「小説」に分類され、「執筆」の推定時期は、安部が「新仮名づかい」[一]で書くようになった時期と照らし合わせ、「一九五一年頃」とされる。本稿では、まず、「大きな砂ふるい」が安部の「執筆」した小説であると判断されてきたことに着目する。生前未発表だったこともあってか、これまで、本作およびその文献情報が詳細に検討されることはなかった。しかしながら、一九五〇年代といえば、安部が神話や寓話に取材した作品を書き始める時期であり[二]、最初期の安部文学を検討することは、それが生前未発表作品であっても、安部がどのような素材から文学精神を吸収し出発したかを知るうえで、重要な意味を持つと考える。海外文学からの影響を指摘する近年の論考としては、例えば、糸賀（二〇二二）[三]などがある。

本稿では、「大きな砂ふるい」は安部のオリジナルではなく、翻訳[四]であることを指摘する。さらに、安部がどの言語で書かれたものを翻訳に用いたのかも明らかにしたい。本稿での論点を出発点に、安部の外国語運用能力の程度を知る、引いては、安部文学の材源研究を進める糸口となることを期待したい。論を進める前に、外国語と安部の関わりについて、何がわかっているかを確認しておこう。

一、安部公房と外国語

安部が中埜肇に送った一九四三年一一月四日付書簡[五]には、「リルケの詩」との言があり、ドイツ語が示される。中埜はのちに哲学者となる人物である。安部とは旧制成城高等学校時代の同級生で、当時、京都帝国大学の学生であった。「リルケの詩」は、その内容から、『形象詩集』（原題 *Das Buch der Bilder*）の詩篇「秋」であることがわかる。手紙に限らず、安部はメモにもドイツ語を用いた。例えば、四九年五月一四日付のメモ[六]

にも「自然科学」(Naturwissenschaft)や「哲学」(Philosophie)などの名詞が見える。谷真介の整理によると、安部は一九四〇年に旧制成城高等学校に入学、そこでドイツ語を学んだ。師は阿部六郎(七)であった。安部の学んだ旧制高等学校は第一外国語の類別により、五つに分けられた(八)。安部が入学したのは、その中の一つ、理科乙類(ドイツ語)であった。旧制高等学校では、文科理科を問わず、外国語の教科が重視されており、「外国語ハ英語、独語又ハ仏語ヲ了解」し、その「発音、綴字、読方、訳解、話方、作文、書取及方法ヲ授クヘシ」(高等学校規程 第七条)とされていた。旧制成城高等学校は「外国語ハ英語、独語」のいずれかを選択するものとし、「第一外国語ヲ独語トシタル場合」にはその授業時間は第一学年が週あたり一〇時間、第二・三学年は九時間と定められた(九)。旧制高等学校の学生語にドイツ語が多用されていたことからも示されるように、ドイツ語は集団の連帯感を高めることにも関わった。いわば、生徒の間でのシンボルのような意味も持ち合わせていたのである(十)。安部自身も旧制高等学校での学びから、ドイツ語に一定程度通じていたといえるが、その一方で、全集に収められた情報のみでは、詩の引用や語レベルの記述確認に留まるしかなく、安部のドイツ語運用能力の程度を判断することは難しい。

二、『世紀ニュース』と『世紀群』

次に、「大きな砂ふるい」の「執筆」時期と推定される一九五一年頃、安部がどのような活動をしていたかを確認したい。友田義行による年表(十一)には、四七年から五〇年にかけて、「世紀の会」という名称が見える。〈世紀の会〉は、第二次世界大戦後に活動した文学・芸術グループの一つ(十二)である。四七年春に第一期が発足、その後、四八年春からは第二期、四九年四月からは〈アヴァンギャルド芸術研究会〉と合流し活動しており、機関誌として、『世紀ニュース』を発行していた(十三)。また、もう一つの活動に、小冊子『世紀群』の刊行があった。『世紀群』には次のような刊行意図があった(十四)。次の引用は、「『世紀群』発刊について」の入会申込用紙の記述である。一九五〇年のことである。

> このたび運動をより強力に推進するため左記のようなパンフレットを研究資料として刊行し、パンフレット『世紀群』とこれを呼ぶことにいたしました。入手しがたい文献や作品・会員の作品・新しい表現形式の一つとしての画集等を逐次刊行いたします。各冊三十頁前後 長いものは分冊にして一部金拾円で会員に配布します。月三部の予定で近日刊行のものは——
>
> ★フランツ・カフカ小品集 花田清輝訳
> ★小説『紙片』城崎誠作
> ★ファーデーエフ『文芸評論の課題について』

安部自身は『世紀群』にどのように関わったか。それは例えば、『世紀群』に短編「魔法のチョーク」(第四号、一九五〇年一一月推定)を発表したのに加え、挿絵や扉絵なども描いていたことから、多岐にわたっていたといえよう。次の引用は、『世

紀ニユウス』第三号（一九五〇年一二月二七日、発行所・勅使河原宏方世紀）裏面「世紀群」を活字化したものである。

今年九月に着手し十月にカフカを第一号として刊行した世紀群はその後各方面の絶大なる関心と驚異のうちにますます内容を充実させ現在第六号を発刊し又待望の「画集」が今日完成せるに至つた。〔略〕以下七号以後〔一字判読不可〕近刊を紹介すると……／No 7 〔三字判読不可〕／No 8 島尾敏雄 短篇小説／No 9 安部公房 実存主義と共産主義／No 10 ストリンドベルク 童話集／ピカソとの対話…等

「カフカ」とあるのは、『世紀群』一号として刊行した『カフカ小品集』（花田清輝訳、桂川寛挿絵、一九五〇年九月）のことであり、安部はその正誤表作成を担当していた。右の引用でさらに注目したいのは、「ストリンドベルク」の名があることである。結局、『世紀群』は七冊刊行された時点で中絶、『ストリンドベルク 童話集』も未完に終わっている。

本節で確認したのは次の点である。一九五〇年前後、安部は〈世紀の会〉に参加していたこと、会の活動の一つが『世紀群』の刊行であり、一〇号目として刊行が予定されていたのが「ストリンドベルク 童話集」だったことである。このあと確認すべきことは次の二点、「ストリンドベルク」とはどういう人物なのか、「童話集」とはどういうものかということである。

三、Strindberg

Strindberg, Johan August は、スウェーデンの劇作家、小説家である。『集英社世界文学大事典』第二巻（一九九七年一月、集英社）によると、「ストリンドベリの名が初めて日本に伝えられた」のは、「一八九八」年「森鷗外訳のフォルケルト著『審美新説』」においてであるが、「最初の紹介は上田敏」（六五九頁）によってであった。また、「大正末に新潮社は小説全集と戯曲全集を同時出版し、岩波書店も全集を出し」（六五九頁）ている[十五]。ただし、共に中絶。三井光彌の解説[十六]をもとに、ストリンドベリ作品はどの言語の版が知られていたかを確認すると、昭和初期において、ストリンドベリの著作が原語で読まれていたのは「殆ど瑞典国内に限られ」ており、「広く読まれて居」たのは「エミール・シェーリング」（二頁）訳のドイツ語版であった。日本語への重訳もこれに拠ったようである。

ここで *Sagor* に目を向けたい。新潮社版、岩波書店版いずれの全集にも収められてはいないが、日本語で『童話集』と訳される、一九〇三年に発表されたこの作品集には一三の話[十七]が収められる。その中でも第二話に注目したい。各言語の日本語訳を試みると、スウェーデン語 *Stora Grusharpan* は「大きな砂利ふるい」と訳出でき、ドイツ語 *Das Grosse Kiessieb* は「大きな砂利ふるい」、英語 *The Big Gravel-Sifter* も「大きな砂利ふるい」となる。

この、タイトルに関する一致から生じる疑問こそ、本稿冒頭に示した、「大きな砂ふるい」は安部のオリジナルではなく、翻訳なのではないか、ということである。ただ、タイトルの一致だけでは翻訳であることの証明にはならず、内容の一致を確

認する必要がある。「ストリンドベルク　童話集」には言語含め様々な版がある。どの版を読んだかを明らかにできれば、安部がどの言語に通じていたかもわかるのではないか。

四、本文比較

ここからは、「大きな砂ふるい」が翻訳であることを引用から確認するとともに、用いられる語彙から、安部がどの言語で書かれたものを参照したかを検討していきたい。参照した資料の文献情報は以下のとおりである。

■　スウェーデン語　一冊
（書名）*Sagor; och, Ensam*（出版者）Stockholm: Albert Bonnier
（出版年）一九二〇年（披見）京都大学文学研究科図書館蔵本

■　ドイツ語　三冊
（書名）*Märchen*（訳者）Schering, Emil（出版者）Berlin; Leipzig: Seemann（出版年）一九〇四年（披見）ハーバード大学蔵本（十八）
（書名）*Märchen und Fabeln*（訳者）Schering, Emil（出版者）München: Müller（出版年）一九一八年（披見）京都大学吉田南総合図書館蔵本
（書名）*Märchen und Fabeln*（訳者）Schering, Emil（出版者）München: G. Müller（出版年）一九二〇年（披見）京都大学文学研究科図書館蔵本

■　英語　一冊
（書名）*Tales*（訳者）Potts , Leonard James（出版者）London: Chatto & Windus（出版年）一九三〇年（披見）京都大学附属図書館蔵本

それでは、作品の書き出しから見ていこう。「大きな砂ふるい」の舞台は海であり、人と魚が描かれる。魚の名前には網かけを施した。

若い漁師が釣糸をたれているのを見まもりながら、うなぎの母親とその息子が、岸に接した海底でねそべっていた。

これに対応すると考えられるのが、次の引用である。まず*Sagor*の英語版*The Big Gravel-Sifter*（以下、《英》）を示す。前節で日本語版はドイツ語からの重訳であることを指摘した。《英》については、当該書冒頭の〝TRANSLATOR'S NOTE〟に「THIS translation of August Strindberg's *Sagor* was begun at Uppsala University, Sweden, in 1923.」とあった上で「But I could not have completed it〔= *Sagor* の翻訳〕without the help of some English and many Swedish friends, Dr. Olof Östergren in particular.」（p.v）とあり、日本語版と異なり、《英》はドイツ語からの重訳ではなく、原語・スウェーデン語からの訳出であると考えられる。引用に続く（ ）内に拙訳を示した。

THERE was once an eel-pout who lay with her son at the bottom of the sea by the steamboat jetty, watching a boy fixing his rod for fishing.　(p.21)

（むかし、蒸気船の桟橋のそばで息子と一緒に海の底に寝そべって、釣りのために竿を直している少年を見ていたギ

ンポ［もしくは口の尖ったウナギ］がいた。）

ここで魚は一種類 eel-pout が挙げられている。これを一語とみなすと「ギンポ」と訳出でき、pout を動詞とみなすと「口の尖ったウナギ」とも訳出できるが、「大きな砂ふるい」にある「うなぎの母親」の「母親」にあたる名詞は確認できなかった。同じ個所をドイツ語版 *Das Grosse Kissieb*（以下、《独》）でも確認してみよう。本文の引用は一九〇四年版に拠り、【 】内には一九一八年版の表記を記した。異同のあったところに傍線を引いた。なお、一九一八年版と一九二〇年版の間に異同はない。

Es lag einmal eine Aalmutter mit ihrem Sohn unten auf dem Seeresgrunde【→ Meeregrunde】neben der Dampferbrüke, und sah zu, wie ein Bursche seine Rute in Ordnung brachte, um zu angeln. (p.19)

（むかし、一匹のウナギの母親［もしくはギンポ］が息子と一緒に、蒸気船の橋のすぐそばの海の底【→湖の底／海の底】にいた。そして一人の少年が釣りをしようと釣竿を正す様子を眺めていた。）

ここには、魚を表す名詞として Aalmutter がある。Aal（ウナギ）と Mutter（母親）からなり、「ウナギの母親」と訳出できる。なお、「ギンポ」とする辞書（十九）もある。次に進もう。左の引用は、安部「大きな砂ふるい」の書き出しに続く場面である。

うなぎの母親が言った。／「そら、あの男をごらん。うき世の悪意とずるのいい見本…見てごらんよ。手にむちをもっている。むちの紐を投げている――そら、そこにある。紐を沈める重しがついている――それだよ。その下にあるのが虫のついた鉤なのさ。どんなことがあってもあれを口に入れてはいけないよ。もしそんなことをしようものなら、おまえはつかまっちまうよ。だいたいばかなすずきか赤眼だけが食いつくのさ。さあ、これでおまえはあれについてすっかり知ったわけだ。」

とあり、「ばかな」魚として「すずき」「赤眼」が挙げられる。《英》を見ると、

〝Look at him,〟 said the eel-pout, 〝and you will learn the wickedness and deceit of the world...Look at him now; he has a whip in his hand: he throws out the line: there it is! Then, sinking down, comes the weight: there it is: and then comes the hook with a snake on it. You mustn't take that in your mouth, or you will be caught. It's only silly perches and roaches that are taken in. So now you know.〟 (p.21)

（「彼を見てごらん」とギンポ［もしくは口の尖ったウナギ］が言った。「そうすれば、お前はこの世の邪悪さと欺瞞を知ることになるよ…彼を見てごらん、手に鞭を持っていて、糸を投げ出している。そして、沈んでいくと、重りが来て、そこには蛇のついたフックがある。それを口に入れてはいけない。取り込まれるのは、愚かな perches と roaches だけ。そういうわけで、これで分かったね。」）

とあり、perches と roaches が「愚かな」魚として挙げられる。《独》にも同じく二種類の魚の名が確認できる。

〝Sieh den an!〟 Sagte die Aalmutter, 〝da kannst du die Bosheit und Hinterlist der Welt kennen lernen … Sieh, er hat eine Peitsche in der Hand; und dann wirft er die Schnitze aus; da ist sie! Dann kommt der Klöppel, der hinunter zieht【→ hinunterzieht】; da ist er! Aber dann kommt der Haken mit einem Wurm daran! Den darfst du ja nicht in den Mund nehmen, denn dann【→ dann】sitzest du fest! Nun, es sind nur dumme Barsche und Rotaugen, die sich verlocken lassen. So, nun weißt du es!〟 (p.19)

（「あれを見てごらん！」ウナギの母親〔もしくはギンポ〕は言った。「あそこでお前は世の悪事や罠を知ることができるよ…ほら、彼が手にむちを持っているだろう、それから彼はむちひもを投げている、あそこにあれがあるだろう！ それから打ち棒が下にやってくる、あそこにあれがあるよ！それには虫がついた針がやってきた！それをお前は口にしてはいけないよ、そういう時にはじっとしておくんだよ！ほら、誘われるのは、やっぱり愚かな Barsche や Rotaugen だけ。とにかくお前はわかったね！」）

ここで、魚の名前に着目することで、どの魚種がどのように対応するかを調べたい。ここでは、安部「大きな砂ふるい」にある「赤眼」、《英》にある roaches、《独》にある Rotaugen がどのような魚なのかを確認したい。調査では、各言語の百科事典も確認した。英語については *The Encyclopædia Britannica*（二十）を、ドイツ語については *Der grosse Brockhaus*（二十一）を、また必要に応じ *Meyers Lexikon*（二十二）を参照した。

まず、「大きな砂ふるい」にある「赤眼」について。田中茂穂（二十三）によると、アカメは学名を「*Psammoperca waigiensis*」といい、「「セラヌス」科」もしくは「ハタ科」（六〇二頁）に分類される。その「体は稍や長く、側扁し」（六〇三頁）ており、「口は大きく、斜にして、側裂を有し、下顎突出し、其先端内方に曲が」（六〇四頁）る。また、「背鰭は二つに分れ、胸鰭基底の後方に初まり、棘は肥厚し、溝内に押し入るるを得べし」（六〇四頁）とある。

一方、《英》にある「roach」は、*The Encyclopædia Britannica* には、学名「*Rutilus rutilus*」と書かれている。また、「a cyprinid fish of England, Europe and Siberia. It is a moderately deep, silvery fish. Specimens of more than 3 lb. are rare.」（Vol.9, p.339）とあり、イギリス、ヨーロッパ、シベリアに生息しているコイ科の一種であり、その体色は銀色であることがわかる。

また、《独》にある「Rotauge」は、*Der grosse Brockhaus* には、学名「*Leuciscus rutilus*」と書かれている。また、「ein bis 30cm langer mitteleurop. Weissfisch mit waagerechter Mundspalte, adgerundeter Bauchkante, roter Iris und einreihigen Schlundzähnen.」（Vol.9, p.243）とあり、体長三〇センチほど、腹部は丸みを帯びており、虹彩が赤色であることが外見上の特徴であるとわかる。

これらの説明から、アカメは roach や Rotauge と同一とは考

えにくい。実際、アカメはスズキ目アカメ科（二十四）、roach と Rotauge はコイ目コイ科に分類され、アカメとは別種である。そうなると、アカメは《英》《独》いずれにも見られないため、翻訳の可能性は薄いのではないかと思われるかもしれない。

しかし、アカメという名前が出てきた可能性について、これは、名詞 Rotaugen の組みたてを見ると明らかになる。この名詞は二つの品詞、Rot と Augen からなり、それぞれ、Rot は形容詞で「赤い」、Augen は名詞で「目」の意である。roach にその意はない。また、Rotaugen を魚の「アカメ」とする辞書は確認できなかった（二十五）。ここで一つ言及しておきたいことは、「アカメ」が「大きな砂ふるい」に出てくることが、安部が《独》を見ていた可能性を示す大きな手がかりになるということである。安部が「アカメ」という魚種を認識していなかった可能性もある一方で、Rotaugen を「銅色うぐひ」（二十六）や「アカハラ」（二十七）、「うぐひ」（二十八）と訳していないことから、安部がこの名詞を構成する Rot と Augen の意味から訳出した可能性も極めて高い。続いて、作品末尾を確認する。まず、「大きな砂ふるい」の末尾を示す。魚と鳥の名前に網かけを施した。

秋が来て、そろそろ冬の風が吹きはじめるころ、千の群をなしたにしんがやってきて音楽のなる箱の中を泳いだ。それは告別のコンサートにほかならなかった。かもめと荒々しいうみつばめが耳傾けに群がった。そして夜中、音楽のなる箱は遠く沖にはこび去られた。それがこの出来事の終りであった。

次に、《英》を示す。

With the first storm of autumn the pilchards came in their thousand thousands and swam through the musical-box. It was a farewell concert with a vengeance; terms and sea-gulls gathered to hear it. And that night the musical-box went out to sea; and there was an end of the whole business. (p.27)

（秋の最初の嵐とともに、pilchards が何千匹とやってきて、音楽の箱の中を泳いでいった。それは徹底的な別れの音楽会であった。terms と sea-gulls がそれを聴きに群がった。そしてその夜、音楽の箱は海に出ていった。すべての出来事の終わりだった。）

続けて、《独》は次のとおりである。

Als der Herbst kam【→begann】 und der erste Sturm heulte, da kam der Strömling zu tausenden【→Tausenden】 und abertausenden【→ Abertausenden】 und zog durch den Spielkasten. Das war eine Abschiedsmusik, das kann man glauben,【→!】 Fischschwalben und Möwen sammelten sich, um zuzuhören. Und diese Nacht fuhr der Spielkasten in See; und da war es aus mit der ganzen Herrlichkeit. (p.24)

（秋が来て【→秋が始まり】、最初の嵐が轟いたとき、小さい Strömling が何千匹とやってきて、演奏する箱の中を通り抜けていった。それはまさに別れの音楽だった【→】Fischschwalben や Möwen が集まってきて、耳を傾けた。

そしてその晩、演奏する箱は沖へ出ていった。そうして素晴らしいことも終わってしまったのだった。）

整理してみよう。安部「大きな砂ふるい」には、魚の名前として「ニシン」、鳥の名前として「かもめ」と「うみつばめ」が確認できる。《英》では、魚の名前として pilchards、鳥の名前として terms と sea-gulls が、《独》では、魚の名前として Strömling、鳥の名前として Fischschwalben と Möwen がそれぞれ確認できる。pilchards（英語）と Strömling（ドイツ語）は「ニシン」を指し、sea-gulls（英語）と Möwen（ドイツ語）は「カモメ」を指し、三つに共通している。ここで、「うみつばめ」（安部）と terms（英語）と Fischschwalben（ドイツ語）が同一であるかを確認したい。

「うみつばめ」は、黒田長禮[二十九]によると、「海燕科」に分類される「海鳥」であり、英名は Petrel。「嘴は先端鉤状を呈し、基部は多少左右に扁平にて鼻孔は2個の鼻管の各端に開口す」（九七頁）と形容される。

《英》にある「terms」については、*The Encyclopaedia Britannica* には図が一点と、いくつかの学名が記されている。その学名に共通する属名は *Sterna* であり、黒田長禮[三十]によると、これは「鷗科」に属するグループの一つを指し、その和名をアジサシという。「体は小中形にて何れも翼長く嘴一般に細長く真直なるか先端僅かに下方に向ふ」（一一一頁）と形容されており、「うみつばめ」とは異なる種であると判断できる。

《独》にある「Fischschwalben」については、*Der grosse Brockhaus* ならびに *Meyers Lexikon* はこの語を見出し語として採っていない。《独》にある Fischschwalbe は、Fisch（魚）と Schwalbe（ツバメ）からなる複合名詞だが、鳥類の書籍でもやはり管見には入らなかった。ただし、ウミツバメの記述として「Sturmschwalben 海燕科」[三十一]が確認できた。「Sturmschwalbe」については、*Der grosse Brockhaus* が見出し語としている。そこに掲げられた図、また、ドイツ語で書かれた鳥類事典[三十二]での記述から、ウミツバメと Sturmschwalbe は同一であるといえる。

二〇二四年現在における分類もあわせ、改めて示すと、ウミツバメはミズナギドリ目ウミツバメ科に分類される海鳥である[三十三]。Tern、和名アジサシは、ウミツバメと同様に海鳥の一種だが、チドリ目アジサシ科に分類されており[三十四]、別種である。

ここまでで、タイトルに加え、語彙や表現も酷似していることから、「大きな砂ふるい」は、安部の手による小説ではなく、《独》の翻訳である可能性が極めて高いことが確認できた[三十五]。本稿での指摘をもとに、書誌の修正を提案したい。それに加え、ここで改めて注意を促したいのは、翻訳の正確性の高さである。

一方、「大きな砂ふるい」には《独》を逐語訳しただけとは考えにくい、ドイツ語文とは異なる個所もいくつか見られる。それが時制表現に関するところである。動詞に着目してみよう。まず《独》を引用し、動詞に太字の傍線を引いた。

> Ja, und dann **entstand** da oben ein entsetzlicher Lärm. Es **trampelte** und **strampelte**, als man in zwei Sekunden eine Brücke zwischen Boot und Land **baute**. Aber es **war** schwer, etwas zu sehen, denn sie **ließen** da oben Ruß und Öl aus.／Es

war etwas sehr Schweres auf der Brücke, so daß die kreischte, und einige Männer fingen an zu singen: (pp.19-20)

（そうだった。それで、その上では恐ろしい音がしていた。二秒でボートと陸をつなぐ橋をかけたとき、ドシドシ、バタバタと音がした。しかし何かを見るのは難しかった。上ではそれが煤と油を出していた。／橋の上には何かとても重いものが載っていたため、それはキーキー音をたて、数人の男たちは歌いはじめた。）

次に、「大きな砂ふるい」の対応個所に関し、動詞の過去形（タ形／テイタ形）に二重傍線、非過去形（ル形／テイル形）に波線を引いた。

もうれつな騒音が上で起ったとき、彼女はやっとこれだけのことを口にした。上の人間たちはボートと岸をわたす橋をたった二秒間で渡ろうとしているらしく、ガタガタ足をふみならす音がする。しかし水を不透明にきたなくした油と煤のために何も見えなかった。／今橋の上にあるのは何か非常に重いものだ。橋がキーキー鳴っている。人が叫声をあげている。

一部、傍線を引いていない動詞もあるが、それは過去形と非過去形の入れ替えがきかないと考えられるためである。一方、波線を引いたところは非過去形（ル形）で書かれているが、過去形（タ形）にも置き換え可能である。なお、《独》では先に示したとおり、いずれも過去形で書かれている(三十六)。安部がこの点にどこまで意識的だったか。あるいは、意図せざる形で「大きな砂ふるい」に出現している可能性もある。いずれにせよ、ここに初期安部文学の特質を見出すことができるのではないだろうか。引き続き、慎重に検討したい。

おわりに

今回、安部「大きな砂ふるい」は Strindberg, Johan August 作 *Stora grusharpan* の翻訳であることを、文中に使われた語彙を手がかりに明らかにした。安部が依拠したのは、原書ではなく、また英訳でもなく、Schering, Emil によるドイツ語訳だった可能性が高い。さらに、ドイツ語に関する安部の「書く」「読む」能力の高さが窺えた。ここから、海外文学を自身で訳出することで摂取していた可能性が出てきた。安部がストリンドベリを選んだ背景には、〈世紀の会〉のメンバーからの要請があったかもしれないし、あるいは安部自身の考えがあったのかもしれない。これについては今後検討していきたいが、少なくとも、翻訳作業を通じ、文体を意識する契機になったと考える。

また、佐々木（二〇一二）では、後年の長編小説、『箱男』（一九七三年三月、新潮社）はその材源の一つに、イギリスの劇作家・詩人 Pinter, Harold（一九三〇―二〇〇八）の戯曲「かすかな痛み」（原題 *A Slight Ache*）があったことを指摘した(三十七)。調査の結果、安部の記録から『箱男』以前に出版された邦訳とは違う文章が見つかり、英文からの訳出も試みていたと考えられる。安部の言語運用能力の解明が、材源の選択肢の幅を広げていたことを証明する足がかりにもなると考えられる。

今後の課題としては、次の二点が挙げられる。第一に、安部、あるいは〈世紀の会〉のメンバーがストリンドベリ「童話集」の翻訳を手がけるに至ったその契機を解明することである。一九四〇年代にストリンドベリに言及した作家として、花田清輝がおり、よく知られるように、花田と安部は四〇年代後半から五〇年代前半にかけて同じ場で活動していた。安部は花田からストリンドベリを学んだ可能性もある(三十八)。

第二に、この翻訳を通じ、安部は表現形式において何を獲得しえたのかという点である。安部の文体に着目したものとして、本多秋五の「変貌の作家」という評(三十九)、それを引く鳥羽耕史の「多様な文体や方法上の実験を試みた」という言(四十)などがあるが、言語の表現形式を明らかにするには、作中の語彙や表現の変遷を計量的に見ていくことが求められる(四十一)。本稿は、その基盤をなすものと位置づけられよう。

[注]

(一) 現代かなづかいを指していると考えられる。現代かなづかいの内閣告示は、一九四六年。

(二) 佐々木幸喜「安部公房「プルートーのわな」の素材」『人間・環境学』、二〇一三年一二月。

(三) 糸賀寛「安部公房とエドガー・アラン・ポー(一)――「異端者の告発」「どれい狩り」「第四間氷期」をめぐって――」『京都大学國文學論叢』、二〇二二年九月。

(四) 「翻訳」と「翻案」については、鈴木登美「翻訳と翻案から見る日本近代の作者性」(ハルオ・シラネほか[編]『〈作者〉とは何か――継承・占有・共同性――』、二〇二一年三月、岩波書店)を参照。鈴木は、(独創的な西洋文学の)原作を忠実に複製する「翻訳」が、「翻案」との差異化を図る中で、「翻案」ということばが一九一〇年代初めに批評言説の中から消えた後、大正・昭和戦前期を通じて確認ができないこと、再びこのことばが現れるのは一九五〇年代であると指摘する。本書については、編者・十重田裕一氏(早稲田大学)にご教示をたまわった。

(五) 『安部公房全集』第一巻(一九九七年七月、新潮社)所収。

(六) 「MEMORANDUM 1949」、前掲『安部公房全集』第二巻所収。

(七) 谷真介[編]『安部公房評伝年譜』(二〇〇二年七月、新泉社)。阿部との交流は高校卒業後も続いた。一九四七年、安部は阿部に「故郷を失ひて」第一章を渡す。これが『個性』に紹介されたことが、安部が文壇に出る契機となった。

(八) 文部科学省『学制百五十年史』資料編、二〇二二年一二月。

(九) 成城高等学校[編纂兼発行]『成城高等学校一覧』昭和一四年度、一九三九年七月。

(十) 米川明彦『集団語の研究』下、二〇二二年三月、東京堂出版。

(十一) 鳥羽耕史[編]『安部公房 メディアの越境者』(二〇一三年一二月、森話社)所収「安部公房年表」。

(十二) 『世紀ニュース』一号(一九四九年三月二五日、編集兼発行人・安部公房、発行所・月曜書房内世紀)および、瀬木慎一『戦後空白期の美術』(一九九六年一月、思潮社)。

(十三) 鳥羽耕史「〈夜の会〉〈世紀の会〉〈綜合文化協会〉活動年表」(『徳島大学国語国文学』、二〇〇四年三月)。また、全五号であっただろうことが、鳥羽耕史の調査で明らかになっている。鳥羽耕史「安部公房の戦後――真善美社から〈世紀の会〉へ――」『國文學 解釈と教材の研究』(二〇〇三年四月)参照。いずれもガリ

版刷り。なお、第一号は一九四九年三月発行。ただし、その誌名には表記の揺れがある。例えば、二号、三号の表紙には「世紀ニユウス」と表記されている。

（十四）前掲『安部公房評伝年譜』。

（十五）大正期作家のストリンドベリ受容に関する指摘として、十重田裕一「鏡としてのドストエフスキー・ストリンドベリイ――大正期・横光利一への視角」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇〇年六月）を参照した。

（十六）「ストリンドベリ挿話：本号所載写真の解説」（『世界文学全集』第二七巻［一九二八年九月、新潮社］月報「世界文学月報」第二〇号）。前掲『安部公房評伝年譜』によると、全集が「中学時代自宅にあ」り、月報を目にしていた可能性がある。また、全集第一巻（一九二九年八月）『神曲』（生田長江訳）を下敷きに、「デンドロカカリヤ」（『表現』、一九四九年八月）を執筆したとも考えられる。『世界文学全集』との関わり、当該作品の材源に関しては稿を改める。

（十七）順に掲げると以下のとおり。

I MIDSOMMARTIDER、STORA GRUSHARPAN、SJUSOVAREN、LOTSENS VEDERMÖDOR、FOTOGRAFI OCH FILOSOFI、ETT HALVT ARK PAPPER、TRIUMFATORN OCH NARREN、NÄR TRÄSVALAN KOM I GETAPELN、TOBAKSLADANS HEMLIGHETER、SANKT GOTTHARDS SAGA、JUBAL UTAN JAG、GULLHJÄLMARNE I ÅLLEBERG、BLÅVINGE FINNER GULDPUDRAN

（十八）

https://archive.org/details/bub_gb_dShAAAAAYAAJ/page/n3/mode/2up

（二〇二四年一月三〇日閲覧）。

（十九）権田保之助『ゴンダ独和新辞典』（一九三七年三月、有朋堂）他。

（二十）一九二九年出版、第一四版に拠る。京都大学吉田南総合図書館蔵。

（二十一）一九五二年～一九六三年出版、第一六版に拠る。京都大学吉田南総合図書館蔵。

（二十二）一九二四年～一九三五年出版、第七版に拠る。京都大学文学研究科図書館蔵。

（二十三）田中茂穂『増補改訂日本産魚類図説』第三一巻～第四八巻、一九五二年九月、風間書房。小野田勝造『原色図説動物大辞典』（一九四三年九月、中文館書店）では「ハタ科」に分類される。この学名は、二〇二四年現在、アカメモドキ（アカメ科アカメモドキ属）に適用されている。

（二十四）本村浩之『日本産魚類全種目録』（二〇二〇年五月、鹿児島大学総合研究博物館）。二〇二四年現在の学名は、*Lates japonicus* (Katayama & Taki, 1984)。

（二十五）ただし、片山正雄『双解独和大辞典』（一九二七年七月、南江堂）、木村謹治・相良守峯『木村相良独和辞典』（一九四〇年三月、博友社）など、「赤眼」を語義の第一に挙げる辞書もあり、それを安部が参照した可能性もある。

（二十六）前掲『木村相良独和辞典』。

（二十七）山岸光宣『コンサイス独和辞典』、一九三七年三月、三省堂。

（二十八）佐藤通次『独和言林』、一九三六年四月、白水社。

（二十九）黒田長禮『鳥類原色大図説』第二巻、一九三四年一月、修

教社書院。

（三十）黒田長禮『鳥類原色大図説』第三巻、一九三四年三月、修教社書院。

（三十一）岡田彌一郎・原又栄『動物学用語新辞典』（一九四〇年一月、太陽堂）。Sturmschwalbe は、Sturm（嵐）と Schwalbe（ツバメ）からなる複合名詞であり、そこから「荒々しいうみつばめ」という訳が導かれた可能性がある。スウェーデン語 fisksvalor は、fisk（魚）と svalorna（ツバメ）からなる。

（三十二）Brehm, Alfred Edmund: *Die Vögel*. In: Brehms Tierleben. Bd.8. Leipzig und Wien. 1920.

（三十三）日本鳥学会［編］『日本鳥類目録』（改訂第七版、二〇一二年九月、日本鳥学会）。内田清之助［編輯兼発行］『日本鳥類目録』（第三版、一九四二年六月、東京帝国大学理学部動物学教室）の分類では「管鼻目」「海燕科」。

（三十四）前掲『日本鳥類目録』改訂第七版。前掲『日本鳥類目録』第三版の分類では「鷗目」「鷗科」。

（三十五）調査の中で、安部に先行する翻訳がいくつかあることがわかった。いずれも《独》をもとに訳出していると考えられるが、語彙や表現は安部のそれとは異なっており、安部が自身で訳出したという本稿の主張を支えるものといえる。『図説 児童文学翻訳大事典』第二巻・第四巻（二〇〇七年六月、大空社）を参照。

・「ピアノ」楠山正雄訳、『赤い鳥』（一九二四年二月）

・「大きい礫篩」舟木重信訳、『ストリンドベルク童話集』（一九二四年三月、古今書院）

・「ぴあの」楠山正雄訳、『世界童話集』中（一九二七年一一月、アルス）

・「大きな砂利篩い」浜田広介訳、『ひろすけ訳 世界童話選集』（一九三三年一〇月、文教書院）

（三十六）現代日本語におけるル形／タ形の議論として、次のようなものがある。

・工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテクスト――現代日本語の時間の表現――』（一九九五年一一月、ひつじ書房）

・日本語記述文法研究会［編］『現代日本語文法』三（二〇〇七年一一月、くろしお出版）

・庵功雄・田川拓海［編］『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す』第一巻――「する」の世界（二〇一九年三月、ひつじ書房）

・庵功雄・田川拓海［編］『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す』第二巻――「した」「している」の世界（二〇二一年三月、ひつじ書房）

安部の訳文には、これらの議論につながる要素も見られる。

（三十七）佐々木幸喜「安部公房『箱男』の材源」『國語國文』、二〇一二年六月。

（三十八）「文藝時評　犬も喰わない話」（『新日本文学』、一九四七年一一月）。この頃、安部と花田は《綜合文化協会》にともに参加していた。

（三十九）『物語戦後文学史』完結編（一九六五年六月、新潮社）。

（四十）中村明ほか［編］『日本語文章・文体・表現事典』（二〇一一年六月、朝倉書店）「安部公房」の項。

（四十一）これに関連し、佐々木（二〇二一）では、安部の最初の作品集『壁』（一九五一年五月、月曜書房）を取り上げ、そこに現れる語彙について検討を行った。詳しくは、佐々木幸喜「作品集

『壁』における食の表象：安部公房はその文学に食事をどう描いたか」 In: Miriam Castorina & Diego Cucinelli（Eds.）, *Florientalia East Asian Studies Series*. Firenze: Firenze University Press. 2021.を参照されたい。

［付記］

引用文にある〔 〕内の注記は稿者により、改行は「／」で示した。ドイツ語からの訳出に際し、麻生陽子氏（南山大学）にご教示をたまわった。なお、本稿は、日本近代文学会二〇二〇年度秋季大会（二〇二〇年一〇月二五日、オンライン）での口頭発表「安部公房「大きな砂ふるい」とストリンドベリ」をもとに修正加筆したものである。発表の内外を問わず多くの方々に貴重なご意見をいただいた。また、本稿をなすにあたり、査読者の方々に数多くの重要なご助言をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

（ささき　ゆうき・本学国際高等教育院特定准教授）